

7. 臨床指導者と教員による協働演習がもたらす実習指導への影響—臨床指導者に焦点をあてて—

¹⁾ 看護学部 基礎看護学,

²⁾ 看護部

河野かおり¹⁾, 茅島 綾¹⁾, 板倉朋世¹⁾, 遠藤恭子¹⁾, 仁戸部富恵²⁾, 小松富恵²⁾, 佐藤君江²⁾, 稲葉孝子²⁾

【目的】臨床指導者が基礎看護技術演習に参加することによる実習指導への影響を明らかにする。

【方法】2013～2016年度までにA大学看護学部の基礎看護技術演習に参加の臨床指導者28名(演習群)と基礎看護技術演習に参加しない臨床指導者32名(対照群)を対象に年齢, 性別, 看護職経験年数, 最終看護専門教育学歴, 臨床実習指導者講習会修了の有無, 臨床実習指導経験年数, 演習参加回数, 演習に参加して役立ったこと, 実習指導の具体的な関わり方について「そう思う」「そう思わない」を選択, 自由記載をする質問紙調査を行った。獨協医科大学看護研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】回収率は83.3%, 有効回答率は98%だった。全ての質問項目において, 群間で有意差は認められなかったが, 演習群では「受け入れ学生の特性を把握した上で実習指導にあたった」「達成した目標と未達成の目標を学生と確認できた」「学生個々の反応に合わせた実習指導ができた」「病棟内の看護技術の方法を統一した」「教員との指導に一貫性を持たせることができた」で「そう思う」の割合が高かった。対照群では「学生の学習状況に合わせて計画性のある実習指導ができた」「学生の自己課題を明確にする指導ができた」「今後, 実習指導を行う際に知っておきたい, もしくは経験しておきたいことがある」で「そう思う」の割合が高かった。

【考察】演習参加回数や, 演習参加から調査までの期間が対象者により異なっていたため有意差が認められなかったと考えられる。今後は, 実習病棟の指導者が演習や実習オリエンテーションに参加できるような環境を整え, 実習指導に活かせる機会を増やすことが課題である。

【結論】演習参加は, 学生の特性や教育方法の理解に役立ったが, 実習指導への影響を及ぼすものではなかった。臨床指導者は学生の特性や個々の学習目標の到達度を確認しながら実習指導を行っていることが明らかになった。

8. 地域医療教育におけるアクティブラーニングの検討

¹⁾ 医学部3年,

²⁾ 地域医療教育センター

鷲 瑞月¹⁾, 鱒 明¹⁾, 鈴木健生¹⁾, 網島啓太¹⁾, 西山 緑²⁾, 橋本充代²⁾, 田所 望²⁾

【目的】日本全国の医学部は, 2008年の「緊急医師確保対策」により, 医学部の定員が増加された。獨協医科大学でも, 2010年から地域枠入学制度の導入し, 現在, 地域枠入学者は20名の定員となっている。この地域枠入学者は, 1年から4年までの地域包括医療実習が必須科目となっている。しかし, 現行の地域枠入学制度で地域医療を担う人材を教育することができたか入試制度の見直しが迫られている。

そこで, 本研究は, 地域医療教育におけるアクティブラーニングの支援について検討することを目的とした。

【方法】提出された平成30年度の地域包括医療実習レポートを検討し, 1年から4年の各学年1部抜粋し, どのような学びを得たのか調べた。また, 地域包括医療実習I～IVを履修している学生86名にLMSの匿名アンケートを行い, 「将来地域医療に従事したいか」「地域医療教育は医学生にとって大切か」「自由選択プログラムについて」結果をまとめ, 自由選択プログラム利用者の意見を聴取した。

【結果】実習レポートやアンケート結果から, 多くの学生が地域医療の重要性を認識しており, 将来地域医療に従事したいと考えていた。しかし, アクティブラーニングを支援する自由選択プログラムへの関心はあっても, 実際には行っていない人が大多数であった。しかも, その存在を知らない人もいることが明らかとなった。

【考察・結論】地域医療を担う人材育成のためには, 学生が主体的に地域医療教育に参加する必要がある。そのために自由選択プログラムを活用することは重要な手段である。今後は, このプログラム利用者の経験談を聞く機会や説明会を開く必要があると考える。将来的に, 地域医療に興味を持つすべての学生の主体的な学びを支援するカリキュラムが確立されれば, 地域医療に根差した人材育成がより可能になるのではないかと考える。

【謝辞】地域における実習にご協力いただいたすべての医療施設の皆様方に感謝申し上げます。